

Title	古川徹也著 『日本経済論』 《経済学教室11》
Sub Title	
Author	浜田, 文雅(Hamada, Fumimasa)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2017
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.110, No.3 (2017. 10) ,p.343(139)- 346(142)
JaLC DOI	10.14991/001.20171001-0139
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20171001-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20171001-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



古川徹也著

『日本経済論』《経済学教室 11》

培風館，2017 年 1 月，238 頁

評者：浜田文雅\*

現代日本経済を俯瞰する最初に手にする本

書店の経済関係の書棚には日本経済を論じることをテーマにした本が所狭しと並び、あるいは積み上げられている。評論家、調査・研究員、理論家がいずれもアクの強いキャッチフレーズを掲げて経済理論を自分に都合の良い解釈で利用し、大胆な現状分析や予測結果を実証的な裏付けもせず、追跡調査もせずに公刊している。

一言で日本経済論と言っても、高度に専門的な実証分析の結果を纏めたものから、単なる経済事情の羅列に過ぎないものまで内容は実に多種多様である。読者は日本経済論と題する本を求めようとする時、大いに迷うことになるであろう。一般読者、経済について少しは関心があり、現在の日本経済はどのような状況にあるのか、特に気を付けなければならない事柄は何なのか、どうしてそのようなことが起きるのか、その問題に対する適切な政策はどのようなものか、そして現在政府が取り組んでいる政策は適切なものだと考えて良いのか、などなどについて知りたいと思っている読者諸氏は、少なくとも現代経済学の理論に精通した経済研究者が適切なデータを使って正確に解説したものを手にすべきであろう。そのためには、目の前の多数の日本経済論の書物から自分で選択す

ることができるようにならなければいけない。ある程度経済学の勉強をした人であれば、それはそれほど難しいことではない。選書に自信のない人は、一先ず入門書から始めたほうが良いであろう。一冊の適切な入門書は、その後の読書の選択の可能性を大きく広げてくれることになるのである。

この書は現時点での日本経済の状況を踏まえた上での日本経済論入門書としては、かなりしっかりした内容が収められているように思う。著者古川は経済学の理論家でありながら、経済データの取り上げ方、解釈、推論は極めて自然である。以下では先ず各章の構成を示し、この書の見どころとでも言うべきものを中心として若干の内容を紹介し、少しばかりの議論を追加してみよう。

第 1 章「本書を読むための準備」は、日本経済をマクロ的な視点から観る時に最も基本的な構成要素としての商品市場、金融、財政に関わる経済学的な考え方の枠組みを優しく解説する。第 2 章「日本経済の大きさ：GDP の概念」では、マクロ経済の最も中心的な指標としての GDP の意味とそれによる経済の規模やその変動としての景気循環の様相がデータを用いて示され、説明される。ここでは理論の説明にデータが用いられているとも言えようが、後の章でより立ち入った日本経済の GDP の分析がなされるのであるから、この章はその準備である。

第 3 章「GDP の決定理論」では、マクロ経済の規模の指標である GDP の大きさを決定するケインズ的な理論の大枠が説明される。この章は以下の各章で展開される議論の理論的基礎を与えることが目的である。第 4 章「インフレーション・デフレーションと失業」は、その前半で用語の説明と関連するデータによる観察事実を解説する。そして後半は、この書の一つの核をなす「失われた 15 年」とその後のアベノミックスに関する議論での理論的なツールとしての「フィリップス曲線」の易しい解説である。ここで、最近の日本経済のフィリップス曲線上の位置が右端のフラットな所にあることがアベノミックス政策の有効性を著し

\* 慶應義塾大学名誉教授

く損なっているという深刻な現状が読者の注意を喚起するために、特に指摘されているのは良い。

第5章「日本経済における金融の役割」および第6章「貨幣と日本銀行の役割」は、日本の金融システムの構成と機能を手際よく纏めている。特に、6.3.2「時間的非整合性問題」は、日本銀行の異次元金融緩和が、金融市場への中央銀行のコミットメントが半端なため、市場とのゲームに失敗したという解釈を示唆しているのは面白い。ただし、日銀がそこまでコミットしないということは、黒田総裁が表面的にはかなり強気に見えても、コミットメントは及び腰だということであろう。いずれにしても、著者の皮肉はたっぷりと効いているということである。第7章「バブル経済からアベノミクスまでの金融政策」は、1980年代後半からその回復、リーマンショックそしてアベノミクスの時代までの日本経済の推移を要点だけに絞って概観し、金融政策がどのような変遷を辿ったか、それらは適切であったのかをかなり控えめなスタンスで、しかし分かりやすい文章で纏めている。7.4「アベノミクスと日銀の金融政策」では、既に第4章の後半で示した議論を踏まえた量的緩和政策の期待と現実のギャップが遠慮深く指摘される。第8章「日本の財政」では、その仕組みの解説と財政政策の効果のケインズ的な図式が示されている。ここでは、日本の財政支出の具体的な構成と財源としての税収の具体的な内訳がそれぞれ一表に纏められているので、便利な参考資料となっている。第9章「日本の社会保障制度」および第10章「国債と租税」は、日本の財政赤字とその累積額が巨額に上っているという現実を理解するのに役立つであろう。そこでは、「公債の中立命題」を易しく解説している。巨額の国債発行残高の重圧が日本の消費者に将来の増税を予想させ、その心理的な圧迫もまた消費を委縮させる一つの要因になっていることを示唆しようとしている。最後の第11章「世界の中の日本経済」は、マクロ的視点からの日本の対外取引の主要項目を図・表を使って解説しながら、これらの現状を考えるための理

論として開放マクロ経済学の要点のみを手際良く易しく解説している。第10章と第11章はもう一歩進めた日本経済論を書くための準備作業の様なものとなっているように思われる。

この書の目的は、先に述べたように、日本経済論を勉強してみたいという読者、日本経済の現状を感覚的にはなく筋の通った説明として知りたいという読者にとって、まず繻く参考書または入門書となるであろう。マクロ経済学の専門家が数多くの日本経済論の書物を公刊している。ごく狭い自分の専門分野以外の部分は形式的な理解を強いる解説で済ませ、改めて「何故そうなのか、どうして？」と問われると「えっ」となってしまいそうな専門家の書いた日本経済論は、自分の専門分野以外の問題についてかなり読者に対して不親切な解説で済ましているものが散見される。「何故？」に答えが返ってこないような解説は、読者の知りたいという意欲を削いでしまう。ごく軽い日本経済論の書物で満足する読者にも、もう少し進んだやや本格的な日本経済論を読みたいと思っている読者にも、その前にしっかりした、しかし易しい入門書を我慢して読むことをぜひお勧めしたい。この書は、読者にとって先ず初めに熟読玩味すべき内容を持っていると筆者は考えている。

この書の理論的な解説の部分に出てくる数学は、高校の数学を普通に習得した読者であれば容易に理解できる程度であるから、経済学分野の全くの門外漢であっても、素直に理解できるので、それを使ったマクロ経済学の初歩的な解説部分はむしろ楽しみながら読むことができるであろう。何事もそうだが、「王道」を求める読者はせいぜい耳学問という形だけの話題で満足するほかない。もう少し楽しみたい読者は、日本経済について理解するための多少の前段階の努力が必要である。

以上は内容の紹介を主とするものであった。以下では少しばかり書評としての議論を付け加えておこう。現代の日本経済論を提示すれば、アベノミクスの経済政策とその効果が一つの大きな主題となることは今更言うまでもない。もう一つの

問題は人口高齢化と社会保障の持続可能性である。この書は日本経済論の入門書であると著者古川自身が指摘しているのであるから日本経済論のすべての領域をこの書がカバーすることを期待することはないものねだりになってしまう。今後の著者に期待すべきであろう。ここでは、アベノミックス政策に関わる問題に絞ってこの書の議論に若干の論評を加えたいと思う。

アベノミックス政策に関する議論は第6章「貨幣と日本銀行の役割」および第7章「バブル経済からアベノミクスまでの金融政策」の二つの章でごく控えめに展開されている。アベノミックス政策とその効果についての議論をするためのお膳立てとしては簡潔かつ易しく解説されていて、読者はこの問題を考える上での必要最小限の知識とその理解が得られることは間違いない。特に、「異次元の金融緩和」政策が日本銀行と民間金融市場および民間消費者とのゲーム的な時間的非整合性問題としてきわめて簡潔明快に述べられているのは良い。ただ、著者自身が指摘しているように、失業率が低下しても物価上昇と結びつかないという現実がフィリップス曲線の最近の部分（平坦になっている）として示されながら、この金融政策の限界にはあまり踏み込んで解説していないことが惜まれる。もし異次元金融緩和にもう一段踏み込んでいけば、物価上昇期待が確実に誘発できると著者が主張するのであれば、更なる大幅な金融緩和をどうやって実現できるのか、それは何らの副作用も起こさずに可能なかを説明する責任がある。第6章では、マネタリーベースの残高を示しながらマネーサプライとGDPの比率としてのマーシャルの $k$ の値が国際的に見ても過去との比較からしても極めて異常な高さに達しているという事実にも注目すべきであった。このことはアベノミックスの成長政策に関わる議論とも関連するが、他の箇所での所得分配の不平等の是正もあまり効果を上げていない点とも関連している。

円安と株高は企業収益を大きく伸ばしたが、それは内需の拡大に繋がらない。つまり、アベノミッ

クスは内需拡大よりも輸出拡大を成長の梃にしようとしたが、それは成功していないのである。この点に関して、著者がアベノミックス政策とその効果をどう見るかについては、賛否は別としても少し踏み込んだ議論があっても良かったのではないか。

円安によって輸出企業を中心とする国内企業の利益が拡大しているにもかかわらず、法人税収はそれほど伸びず、企業は依然として国内市場の将来に悲観的であることを反映して内部留保の積み増しに余念がなく、実物的な資金の国内循環が一向に拡大しないという日本の資金循環の現状を説明するためには、「SNA 勘定」に基づく資金の実物面の流れを簡単に解説してほしかった。内部留保の積み増しは、実物的・産業的な資金循環におけるブラック・ホールである。日本経済のブラック・ホールの解消こそがアベノミックス政策に課せられた最大の課題であった筈であるから、少しでもこの点に読者の注意を喚起することが望ましかった。

以上に幾つかの議論を強化すべき項目のみを記したが、この書が日本経済論の入門書として極めて手堅い基本書であることに変わりはない。入門書の必要条件は、それを読むことによって確実に次の段階に進めるということである。読者はこの書を熟読した後に、自分でマクロ経済のデータをインターネットから入手して、この入門書に従って日本経済の現状を様々な角度から観察し、分析することを試みたら良いであろう。更に、書店に並ぶ日本経済論と銘打った書物を手にとって、それらがどのようなやり方で書かれているかを自分で調べることができ、読むべき本を自分で選ぶことができるようになるであろう。

初めに述べたように、書店の棚には日本経済論やそれに類する書物が所狭しと溢れている。しかし、少なからぬその種の本が、理論をしっかりと踏まえたものというよりも持論を強調するために単なる直感や尤もらしい理論の誤用をしているとしか言ひようのないものであるように思われる。

読者は自分の選書の眼力を鍛えることも必要なのである。

最後に、これは蛇足ではあるが、初心者の読者でも熟読すれば気付くようなケアレス・ミスが

散見されたことを指摘しておく。これらは読者の一つの楽しみとして、ここでは取り上げないことにした。